

平成25年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)

実施報告書

HT25027

獣医の卵達と一緒に、野生動物保護とその病気の関係について考えよう！



開催日：平成25年8月6日(火)～7日(水)

実施機関：酪農学園大学 構内全域  
(実施場所)

実施代表者：浅川 満彦  
(所属・職名) (獣医学群・教授)

受講生：小学・5・6年生 27名

関連URL：<http://www.rakuno.ac.jp/2013/09/19545/>

【実施内容】

【受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また、自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点】

- (1) 科学研究内容である野生動物の寄生虫病について、子供たちに理解してもらうために「野生動物のお医者さん」というフレーズを用いながら、「野生動物を対象にした獣医師の本当の役割」「何が本当の野生動物保護なのか」「研究を行う意味」「科研費制度と研究内容」について2日間をかけて説明した。時間をかけながら徐々に掘り下げることで、子供たちにも深く理解してもらえるようなプログラム作りを心掛けた。
- (2) 野生動物獣医師の体験として野生動物の捕獲ワナの設置・追放体験を行った。(結果、ヒメネズミ2匹を捕獲) この体験を通じ、野生動物が我々の生活圏の身近な存在であり、野生動物の病気が我々ヒトや家畜にも影響をおよぼす可能性があることを子供たちに感じてもらった。そして、野生動物獣医師は怪我をした個体の治療も大切ではあるが、病気(異常)の解明を行うことがとても大切であり、それを可能とするためには“研究活動が大変重要である”という道筋を立てて、子供たちにも容易に理解できるように研究活動の意義を説明した。
- (3) 獣医師体験として、ぬいぐるみを的に吹き矢体験を行い、その後、日頃獣医師が使用するメスや針を使用し、食用の鶏肉を切開・縫合する等の手術の模擬体験をさせた。これにより、一般的な野生動物獣医師の役割である、個体の治療についても触れ、“命の大切さ”という倫理的な面も訴える内容とした。
- (4) 寄生虫の説明については、代表者が行うだけでなく、学生にも発表時間を与え、協力体制を組むことで、より子供たちに理解を得やすいような体制とした。また、実際に多くの寄生虫の標本を用い、また各班に1つずつ顕微鏡を用意し観察させ、日頃、子供たちには馴染みの薄い寄生虫について観察体験を通して学んでもらった。
- (5) イラストを多用したテキストを作成し、5-6年生の子供達が興味・関心をもてるように工夫をした。
- (6) 参加者がすぐに打ち解け合えるように名札を用意し、また、アイスブレイキングとして互いの自己紹介を行わせた。

【学習用ワーク(当日資料)】



【当日のスケジュール】

スケジュール【1日目】		
12:30-13:00	集合	研修館
13:00-13:20		開講式(挨拶、オリエンテーション、科研費の説明)
13:20-14:50	1時間目	お話1)「野生動物の病気と保護活動」(途中10分休憩)
15:00-15:30	2時間目	体験1)「野生動物捕獲ワナ設置実習」(演習林)
15:30-17:00	3時間目	体験2)「獣医さんのツールを使ってみよう」(B4号館3F) (内容:切開・縫合等の手術体験、聴診器で体の音を聞こう、 動物に麻酔をかけるには?(吹き矢体験)) (途中10分休憩)
18:00	解散	

## スケジュール【2日目】

8:30-9:00	集合	研修館（野生動物医学センターへ移動）
9:00-9:30	1時間目	体験3）「身近な野生動物にアプローチしよう！」（野生動物放逐体験）
9:30-10:20	2時間目	体験4）「追跡調査方法・鳥と獣の体の構造の違い」（途中10分休憩）
10:30-11:50	3時間目	お話2）「身近な寄生虫」（説明：6年生竹内さん）
11:50-12:30	4時間目	体験5）「寄生虫と寄生疾病変の観察」
12:30-13:00		昼食（大学生協2F食堂）
13:05-13:15	5時間目	体験6）「鳥の目線でフィールドを見てみよう」（中央館屋上）
13:20-14:00		修了式（アンケート記入、未来博士号授与、集合写真撮影）
14:00	解散	

### 【実施の様子】

本事業を募集した結果、札幌市の他、道内各地からも問い合わせを受ける等、定員の20名を上回る参加希望があり急遽定員を10名追加し30名として対応した。（前日・当日、体調不調で急遽、残念ながら3名のキャンセルあり。）それでも、全ての参加希望者を受け入れることはできなかったため、是非、本企画は今年度のみで単発で終わらせるのではなく、来年度にも引き続き行いたい。参加した子供達は、野外調査・観察会等ではワクワクドキドキした好奇心いっぱいの表情を浮かべる一方で、研究紹介の講義の際には、野生動物の保護活動について子供たち1人1人が真剣に考えている様子が印象的であった。そして、今回のプログラムを通し、科学研究の内容への理解という当初の目的だけでなく、「調査研究のおもしろさや難しさ」も多少なりとも感じてもらえたようでもあった。

【お話1）科研費の説明】



【体験1）野生動物捕獲ワナ設置体験】



【体験2）切開・縫合等】



【体験4）鳥と獣の体の構造の違い】



【お話2）寄生虫の説明】



【体験5）寄生虫疾病変の観察】



【集合写真 参加者27名】



【事務局との協力体制】

事務は本事業の経費管理およびイベント実施に係る関係部署への連絡・調整、広報活動を担当した。

【広報活動】

- ・本学周辺地域である札幌市ほぼ全域の小学生がいる家庭に1部配布される子供情報誌「エコチル」に募集案内を掲載した。
- ・本学園広報室と連携し、大学HPに募集案内を掲載した。
- ・当日は、地元の江別市の広報が取材に入った。その結果、江別市発行の「広報えべつ」に本事業の様子が紹介された。また、本学出版の「酪農ジャーナル(2013.10月号)」でも、掲載される予定である。これは、後日、別様式で報告する。

【子供情報誌エコチルでの広告】

【安全配慮】

- ・事故防止のため、イベント時は、専門的作業に日頃から従事している学生を実施協力者とし、実施前も準備・打合せにも意見をもち、安全配慮に努めた。(受講者5-6人)に対し本学の大学生を1人の割合で班リーダーとした。
- ・受講者および実施協力者である本学学生は損保ジャパン レクリエーション補償プラン(傷害保険)に加入した。
- ・屋内・屋外にかかわらず、常に水分補給を行えるよう準備し、また、常に注意喚起を行うことで、熱中症防止対策を行った。

【課題】

- ・今回の事業においては、アンケートにもある通り、手ごたえを感じる内容となつた。次年度以降の発展性としては、野生動物医学はもちろんのこと、より広い視野のもとで、獣医師全体のプログラム体験ができるような内容が企画できたらおもしろいと思う。一方で、事業の拡大は予算の不足を生んでしまう。については、場合によっては、代表者が所属する獣医学群から分野の違うもの同士が応募し、短期間に2つのテーマを焼きものとして学べるような取り組みを行うのもおもしろいと考えられる。今後も子供たちの知的好奇心を刺激し、社会に貢献できる本事業に意欲的に関わりたい。
- ・限られた予算で本プログラムを成功させるにはそれぞれの大学(組織)からのバックアップが必要不可欠である。
- ・定員の倍近くの参加問合せをいただいた状況から、来年度は先着順ではなく、抽選を行ったり、または選考を行うための基準(例 作文提出等)も場合によっては検討していきたい。なお、本学が立地する江別市からの参加がなかったことは、地元への還元ということから、真剣に考慮すべきと考える。これは、希望・関心が無かったということよりも、情報提供の方法・順番への配慮が足りなかったことが原因である。現に、定員に十分に達成した後多くの江別在住の方からの問い合わせを受けた。次年度、採択していただける際には、今回のことを教訓にし、次に活かしたい。
- ・本学がひらめきときめきサイエンス事業に参画して、今年度は3年目(通算回数5回目)であるが、すでに、本学での他のコースに参加されたりピーターもいた。これは本事業が魅力的なものである裏付けである一方で、より広く周知する方法も検討すべきであると考えられる。

【実施分担者】

浅川 満彦 獣医学群・教授

【実施協力者】 5名

【事務担当者】

立川 直生 学務部研究支援課・主任主事